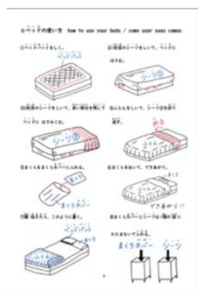
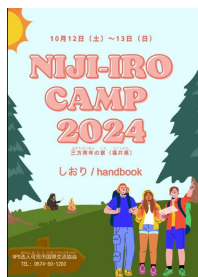


多文化共生事業事例集		年度 R 6
団体名	可児市	助成金名：多文化共生のまちづくり促進事業
		事業総額 1,925千円
事業名	若者の自立支援とネットワーク構築活動	
概要	・外国にルーツのある若者たちの活動の場の提供企画会議 ・キャンプでキャリア教育 キャリア教育を目的とした青少年のキャンプ体験 ・「先輩のはなし」 高校生、大学生、社会人など支援を受けて育った子どもたちが後輩へ自分の経験を伝える場づくり	
事業の背景		事業の詳細
可児市の外国籍市民は8,839人で、日系フィリピン人・ブラジル人が多く、定住率が高く子どもも多い。高校進学率は上昇しているが、日本語や学習への意欲が低く、就労を選ぶ若者も多い。学び続けられず将来像を描けない子どもたちに、キャリア教育やライフプランを学ぶ機会が必要とされている。また、日本育ちの若者からも活動の場を求める声があり、当団体は彼らの居場所づくりや自主的活動の支援方法を模索している。		<u>①キャリア教育キャンプ「にじいろ☆キャンプ2024」</u> 岐阜県内に在住する外国につながる若者（中学生～高校生年齢）を対象とした、キャリア教育キャンプ。若者たちが、非日常的な環境の中で新たな経験や出会いをしながら、活動を通して自分自身の将来を考えることを目的とした。 キャンプの企画及び運営は、教員を目指している岐阜聖徳学園大学3年生の学生と、昨年度実施したキャンプにて、先輩の話「キャリアプログラム」のゲストとして参加していたフィリピン人大学生、当協会の高校進学支援教室の卒業生が参加した。 大学生及び先輩は、当協会が開催している、中学生の学習支援「放課後きぼう教室」および高校進学支援「さつき教室」「かがやき教室」、NPO法人美濃加茂国際交流協会が開催している小中学生の学習支援「MIRAI教室」の見学や、協会職員の話を通して、子どもたちの背景や、日本語力、学習の様子など理解を深めていった。それを元に、キャンプ地の下見、オンラインや大学に訪問して打ち合わせをし、役割分担をしながら準備を進めた。また、運営サポートとして、その教室の支援者及び、恵那市国際交流協会、岐阜市国際交流協会が参加した。 日時：2024年10月12日（土）～10月13日（日）場所：福井県立三方青年の家 【1日目】 8:00／9:00可児駅・岐阜駅集合 12:05青年の家着オリエンテーション 14:00フィールドワーク（*1） 19:00キャンドルナイト（*2） 【2日目】 9:00先輩の話「キャリアプログラム」（*3） 14:00レインボーライン山頂公園散策 17:00／18:00岐阜駅・可児駅解散 （*1）グループで活動し、交流を深める活動。ゲームや施設内のウォークラリー等。 （*2）暗闇の中でキャンドルをともしながら、キャンプの感想や将来のこと、普段の生活の悩みなどを打ち明けていた。 （*3）外国につながる先輩が、来日から現在に至るまで、どのようなキャリアを歩んできたのか、また、今悩んでいる後輩たちにメッセージを伝えた。 <u>②先輩の話（キャリアプログラム）</u> 企画・運営に関わる先輩2名が、自分自身のつながりから先輩ゲストをコーディネートし、合計4名の先輩が話をした。内容は日本人大学生と先輩とで相談し、来日後から現在に至るまでに大変だったこと、どう乗り越えたか、将来の夢、後輩たちへのメッセージなどについて話してもらった。特に、当時の先輩たちの悩みは参加者の若者たちと重なる部分が多く、後輩たちはメモを取りながら話を聞き、涙を流す参加者もいた。先輩たちは自身が置かれた環境の中で、家族や先生の助けを得ながら苦労を乗り越え、新たなステージで次の目標に向かっており、後輩たちに寄り添いながら前向きな言葉を投げかけていた。



事業実施における工夫点・事業の成果等

【キャンプ参加者合計】45名(引率含む)

■外国につながるのある若者27名(14歳～18歳)

国籍：フィリピン・ブラジル・パキスタン・カンボジア・インド

背景：高校進学を希望する過年度生・中学校未修了者、現役中学生・高校生・岐阜聖徳学園大学3年5名

■外国につながるのある先輩6名(企画2名、先輩ゲスト4名)

国籍：フィリピン、ブラジル

背景：大学生3名、社会人3名

■子どもネットワーク関連団体・可児市国際交流協会他

【連携先】

キャンプの運営・引率および各教室等への情報提供において、ぎふ外国につながる子どもの教育を考えるネットワーク（2021年～）に所属する団体と連携をした。

NPO法人CAPCO（大垣市）、岐阜市国際交流協会（岐阜市）多文化子どもエデュニho☆nico（瑞穂市）、わかき教室（関市）、NPO法人美濃加茂国際交流協会（美濃加茂市）、恵那市国際交流協会（恵那市）、岐阜県、岐阜県国際交流センター、JICA日系人研修員

キャンプの企画運営の中心を、岐阜聖徳学園大学に協力を依頼、過去のキャンプ参加者で外国につながるのある若者がアドバイス等をした。

今後の課題・将来に向けての展望等

・支援団体のネットワークを利用し参加者を県内全体に呼びかけたが、結果として可児市近隣の若者の参加のみとなった。本取組の存在がまだ知られていないことや、子どもたちにキャンプの情報を伝える支援者の中には、まだキャリア教育の意義が浸透していなかったため、参加につながらなかったことが要因の一つと考えている。キャリア教育支援の取組を実施し続けることや、内容を発信し巻き込んでいながら、今後も支援者とのネットワークづくりを続けていき、県内に広めてきたい。

・参加者の若者たちは、キャンプ終了後、意欲的に学習に取り組む姿が見られたが、一時的なものであり、継続的な機会の提供が必要である。

・当初の計画は、外国につながるのある先輩たちが集い話し合うことでキャンプの企画運営していくことを目標としていた。しかし、先輩たちも自身の仕事や学業に忙しくなり、集う場を継続して持ち続けていくことに難しさを感じた。

しかし、取組を通して10代の若者たちへのキャリア支援だけではなく、先輩たち自身も自らの次のキャリアに向かって歩んでいることを感じ、彼らが持つ目標に近づくために必要とされることは、日本語力やビジネスマナー、情報収集力、学歴、資格など、何であるのか。また、若者側と企業ではどのようなニーズの違いがあるのか。20代～30代の若者がキャリアアップしていくための支援も、今後必要になっていくのではないかと感じた。

事業担当者のふりかえり

過去にもキャンプに取り組んだことがありますが、過去の参加者が企画運営側となったこと、また、国際交流協会などの他団体と協力して実施する形は初めてでした。このキャンプでは参加者の若者、大学生、ゲスト、関係者それぞれに良い反応が見られる取組だと感じています。可児市は集住地のため、一見先輩と関わる機会があるように思えても、非日常的な環境の中でする新しい出会いや経験が、心のうちを明かしたり、将来をちょっとだけ真剣に考えてみる機会を与えてくれるのだと参加者の表情を見て感じました。今後も団体間で連携しながら、県内でキャリア教育の取組が広がるよう取り組んでいきたいです。